

記入日 2022年9月28日
 助成団体名 一般社団法人きぼう・未来・水俣

2021年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	水俣病を伝えるプログラム活動
取り組み実施期間または日時	2021年4月～2022年3月

【取り組み目的】

1998年、「ほっとはうす」創設から20数年前から続けている「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を、水俣市市内の小中学校の児童生徒、水俣病を学びに水俣に来られた大学生や研究者に継続して伝えていく活動を支えていく取り組み。このことは、水俣病により心身共に苦しみの体験をされてきた患者さん達ではあるが、人生のライフステージごとに「きぼう」を持ち続けてきた。差別等の負の体験を伝えながらも、語りの間には決してあきらめなかった「きぼう」を語り、さらに、「きぼう」の実現を語る。この語りは、患者の人生の自己肯定につながる大切な生きがいとなる。そして、語りの場に居合わせる人達に、イメージの中の悲惨なだけの水俣病から患者自身の人間としての豊かさ気づかされる。そこから、多大な課題がある今の水俣病に近づいてくれる。

【取り組み内容と成果】

2021年はコロナ禍の中での取り組みとなっている。学校（小学校・大学）は、zoomによるリモートでの取り組みだった。事務所への直接訪問による対面でのプログラムは、コロナ感染チェック（PCR検査・抗原検査等）を厳密にされた団体の10人程度までを受け入れた。

以上に対するプログラム数は、43回（10回は熊本県の小学校訪問事業）学校やクラス単位の取り組みも多くあり1,000人以上の人達に伝えた。（小学生、大学生、市民、研究者、司法修習生等）

毎回、患者数人と30数年間患者と共に歩んできた1人を含むグループトーク。水俣病事件史を縦軸に、患者のその時々を横軸に語りのプログラムは展開する。幼少期の話は、かつて患者等の母達から聞いた話を織り交ぜる。補償金を巡る妬み差別の辛かったこと。反転して、20歳のころからの「きぼう」を決してあきらめない粘り強い生き様を語る。※別紙 感想① 感想②

【備考欄】

県、他団体からの委託費では支出ができない費目を貴団体よりの助成金で賄う予算とした。

しかし、委託費で認知される費目の決定や入金年度は年度ギリギリや年度をまたぐ。その間は借入金や貴団体の助成金も運営費の一部で運用させていただいた。

結果、予算で計上した費目は委託費で賄えたりしたが、リモートで事務所に患者さんが来られる頻度が増えて、トイレのバリアフリー改修は急を要したのでこの工事費を優先した。

(一社) きぼう・未来・水俣～発信する笑顔と
水俣病を伝える実践～ (2021年度)



伝えるプログラム zoom オンライン事業前に集合した永本さん、清子さん、松永さん、長井さん。



2021年8月21日(土):加賀田清子さん(8月16日生まれ)金子雄二さん(8月26日生まれ)誕生会、66歳になりました。



スタッフの関根さんの禿げ頭を巡って大笑いの、お二人、清子さんと金子さん。



2022年2月11日(金) 長井さんの65歳の誕生日。コロナ禍以前は毎年のように東京の支援者に囲まれ、鹿児島空港からプレミアム席でゆったりと空の旅を楽しんで京王プラザホテルに宿泊。

そして、山手線を一周して上野公園でパンダと再会。荒馬座公演を鑑賞して舞台上から、誕生日のお知らせがあり会場からHappyバースデーの歌声をプレゼントされる。



2022年2月18日（金） 明水園の半永さん、鬼塚さん、岩坂スエ子さんとzoomで交流。コロナ禍で明水園の入所者は、通院での外出以外は外部との行き来はできなくなりました。度々、岩坂さんから電話をいただいてきぼう会の事務所からzoomで月1回のzoom交流を持つことになりました。

実に2020年から2年ぶりに、お互いの姿を確認しながらおしゃべりをする事ができました。患者さんの入所生活を支える場として、最大のコロナリスクを抱えているのでやむ得ぬ潘さんかもしれませんが胎児性患者さん達もよく耐えています。少しでも、外からの風を送れる役目が果たせればと思います。



㊦ (2020年10月)

映画 MINAMATA がきっかけになり水俣に訪問される様々な方から、声がかかります。

アメリカから来られたカメラマンのポールさんもそのお一人、清子さんとは、たくさんの交流がありました。

ポールさんは、患者さんとの交流をベースに、水俣と患者さんの写真をたくさん撮られていました。

㊦ 春の田圃に可愛らしく咲き乱れるレンゲの花を押し花にする松永さん。

